

—この仕事をしていなければ、自分は「福祉」や「障がい」ということに対して、どれだけ関心を持っていたらうか。—
そう思うことがよくあります。

専門的な教育を受けた記憶もなく、障がいのある方と接する機会もほとんどないまま大人になり、福祉のイメージはどこか別世界のことと感じ、自分とは関わりのないものとして枠組みをしてきました。また、テレビや新聞等、メディアから発信される『ハンデを乗り越えて』や『愛』『助け合い』といった言葉がリアルに感じられず、逆にその清潔さに違和感を覚え、どこか自分から遠ざけていたようにも思えます。いわば社会において無関心とされる中のひとりでした。

そんな自分が14年前、あるきっかけからやまなみ工房と出会い支援員として働くことになって、これまで自分が描いていた福祉というイメージが一転しました。

そこには、障がいとされることを個性として捉え、頑張りや努力を強要するのではなく、あるがままを受け入れられる環境と、その中で生き生きと自分らしく活動する人達の姿がありました。それは、決して弱者ではなく、一人ひとりがぶれない芯の強さを持ち、逞しく格好の良い気持ちよさを感じるものでした。

この時から、これまで福祉や障がいについて全く無関心だった自分が「ひとりでも多くの人に、この人達を知ってほしい。」と思うようになりました。

現在では、様々な媒体を通じて個人や施設、またそこから生み出された作品等が、社会へ発信される機会も増え、福祉の分野だけでなく、障がいのある人の表現活動が芸術の観点から注目され、アートをきっかけとして福祉を知る方も多くなりました。

しかし、それはほんの一部に過ぎず、社会においては今も尚認知度は低く、以前自分がそうだったように無関心層が多くを占めているように思います。否定的なことではなく、福祉や障がいというものはどこか専門性が必要とされる別の世界、自分達の日常には関係もなく影響もないものとして身近に感じない人が多いのではないのでしょうか。

無関心な人、福祉や障がいに対して偏った先入観や固定観念を持つ人達が、少しでも関心を抱き正しい理解をもつことで、障がいのある人達が地域社会において住み良く共生する世の中になれば、もっと社会は豊かなものとなると信じます。それを実現することは自分達の責務でもあります。

清潔や努力を強調することなく、不可能を可能にした成果や困難さばかりを訴えることもない、あるがまま全力で生きる気持ちいい人達を、誰もが当たり前のように共感でき、理解し合える社会になるよう、これからも楽しく面白い様々な仕掛けを打ち出し社会へ、そして未来へ日々発信していきたいと思っています。

早川 弘志

